

和楽器を用いた創造的な音楽教育の実践研究

田村 にしき（児童学科・准教授）

1. 背景

「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編」では、音楽科の改訂の趣旨要点における「我が国や郷土の音楽に関する学習の充実」に、「これまで第5学年及び第6学年において取り上げる旋律楽器として例示していた和楽器を、第3学年及び第4学年の例示にも新たに加える」（p.8）という文言が示され、より一層の指導法の充実が求められるようになった。また、和楽器に限らず、単に演奏するだけでなく、その学びからひろげ、音楽をつくって表現する「音楽づくり」の活動を充実させることが求められている。

それに伴い、大学の小学校教員養成課程においては、そうした小学校音楽教育に対応し、児童に対して和楽器の演奏のみならず、その特性を生かして創造的に音楽をつくる力を育み、「音楽づくり」の授業を立案・指導することができる力を育成することが求められる。

先行研究では、吉原（2022）が実践している邦楽ワークショップにおける箏を用いた音楽づくりや、小学校における音楽づくりの授業の蓄積があるが、小学校教員養成課程において、和楽器を用いた継続的な音楽づくりの活動や音楽劇の創作の実践を行った研究は少ない。また、教育効果の検証として、協働で生み出された音楽の創作過程を詳細に分析した研究は少ない。

2. 目的

このような背景に基づいて、「児童学総合研究」及び「教育学総合研究」の履修者16名を対象に、年間を通した授業の中で和楽器をプロの演奏家から学んだ上で、自ら工夫して音楽をつくったり、児童に指導したりする総合的な力を身に付けるため、①《さくらさくら》や《荒城の月》等の親しみのあるうたを教材とし、旋律やリズムを工夫して即興演奏を行う、②「おむすびころりん」及び「かさこじぞう」の教材を用いて、物語に合う音楽や効果音をつくり、朗読と和楽器による音楽で奏でる音楽劇の創作を行うことである。

箏は、小学校の和楽器の教育活動の中で最も親しまれており、様々な音階に調絃することができるため、音楽づくりに適した楽器であること、三味線は小学校で地域の民謡を鑑賞したりうたったりする中で伴奏楽器としても用いられ、親しまれていること、篠笛は小学校で祭囃子の音楽を学習する際に用いられる等、日本の笛の中で最も親しまれていること等の理由で選定した。

実技指導には、三味線を宮内基弥氏、箏を平田紀子氏、篠笛を岸田晃司氏にご指導いただいた。和楽器による音楽劇創作や音楽づくりの方法論等については、吉原佐知子氏にご指導いただいた。

3. 方法

本稿では、音楽劇「かさこじぞう」の創作に焦点をあて、音楽部分の創作過程を中心に報告する。岩崎京子文(1967)『かさこじぞう』を参考にして台本作りを行った。その中で、効果音や音楽演出をつける場面・事物を図1の通りに決めた。

2023年6月22日、6月29日、7月13日の授業において、グループごとに創作活動を行う際に、ビデオカメラを1台ずつ置いて撮影をした。履修者が、記録した創作過程の映像をもう一度見直し、グループで音楽をつくっていく過程での発言や音楽的なやりとりを通して、どのように作品を生み出していったのかについて自身の創作した作品を中心に分析し、レポートとして記録した。さらに筆者が、創作した作品を採譜し、視覚的に音楽の構造を分析できるようにした。

本稿では、履修者が創作過程を分析したレポート及び筆者が採譜した楽譜を基に、音楽づくりの過程を分析する。

図1 効果音と音楽の演出

効果音・音楽演出をつける場面・事物	イメージした音・言葉（擬声語・擬態語）	効果音・音楽演出の方法
テーマの音楽	ほのほの、のどかなイメージ	「テーマの音楽」の創作
かさを作る音	ギーギー	ギロ
雪の上を歩く音	ザクッ、ザクッ	メタルカバサ
吹雪	ヒュー、ヒュー	篠笛で息を出すような音
地蔵の音	ポクポク（6回）	ウッドブロック
親切なじいさま	やさしいイメージ	「おじいさんの音楽」の創作
雪を落とす音	ガサッ、ガサッ	メタルカバサ
眠りについた後	場面のうつりかわり	ツリーチャイム
地蔵がくる	雪を歩く／神々しい感じ	メタルカバサ、スレイベル
地蔵の音楽	神々しく、次第に近づいてくる感じ	「地蔵の音楽」の創作
地蔵がじいさまの家を探して歌う		「地蔵の歌」の創作
荷物をおろす	ドサドサ	足音
地蔵が遠ざかっていく	音を小さくしていく	メタルカバサ、スレイベル
軒下に、にんじんやごぼうが置いてある	バーン	グロッケン
最後	チャンチャン	木琴

4. 音楽の創作

2023年6月22日、6月29日、7月13日に、和楽器を用いて音楽の創作を行う方法論及び実践について、吉原佐知子氏にご指導いただいた。

創作を行う前に、学生が円になって1人ずつ4拍のリズムを創作し、順番に手拍子でリ

ズム打ちを行う活動を行った。この活動により、反復・変化・拡大・縮小等の音楽のしくみを自然に体得し、後に音楽づくりをする際、音楽の構造を考える基礎の一つとなった。

ここで培ったことを箏を用いた音楽づくりで応用するため、4面の箏をそれぞれ異なる音階に調絃し、グループごとに4分の4拍子で8小節の音楽を即興的につくる練習をした。

箏の調絃には、《さくらさくら》を演奏することができる平調子、乃木調子、琉球音階等、演奏する曲やイメージに合わせて、様々な種類がある。伝統的な調絃の他、教会旋法、全音音階、世界各国の伝統的な音階等にも調絃することができるので、音楽づくりに適した楽器である。

グループで即興的につくった作品を聴き合い、調絃を変えることで、全く異なるイメージの音楽をつくることができることを体感した。

さらに、講師が演奏する沢井忠夫作曲《鳥のように》を鑑賞し、右手で旋律を弾きながら左手でピチカート（爪をはめていない指で絃をはじいて弾く奏法）で弾き、旋律を装飾していく方法や、グリッサンド、押し手、かき爪、合わせ爪、対話をするような音の動き等、創作に必要なヒントを学んだ。

音楽の創作については、「テーマの音楽」、「おじいさんの音楽」、「地蔵の音楽」を創作するグループにわかれて、篠笛・箏・三味線で①イメージの共有、②音探し、③音楽の構造を考える、という流れで創作を試みた。「地蔵の歌」については、全員で旋律を創作した。次ページからの「 」の部分は、学生のレポートの記述や創作中の会話部分、または講師の助言部分である。

4-1. 「テーマの音楽」の創作

①イメージの共有

全体のテーマの音楽は、「昔の情景が思い浮かべられるような曲」「ほのぼのしていて、のどかなイメージ」で創作しようという意見がでた。このことから、箏を乃木調子に調絃した（譜例1）。

②音探し

始めに、箏1の学生が旋律づくりをした。沢井忠夫《鳥のように》の演奏にでてきた旋律型や、講師が付点のリズムに合わせて絃を親指で十から七まで弾いたり、人差し指で五から七まで順番に弾いて戻ってきたりする例等も参考にしながら、譜例2の箏1のように2小節で1つのフレーズになる旋律を考案した。

他の楽器も、箏に合わせて付点のリズムでそれぞれ短いフレーズを創作した。ベースとなる箏2は、1拍目と3拍目でベースの低音を繰り返す他、2拍目と4拍目の裏拍で、箏の下のを左手でたたいて打楽器のようにはやし立てる工夫がなされた。

③音楽の構造

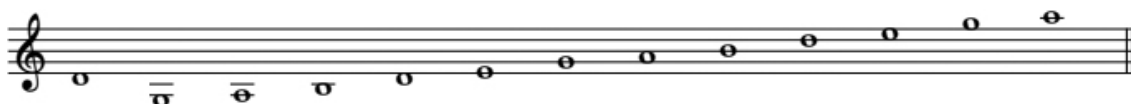
それぞれが演奏する順番や、反復、変化を考えながら、全体で即興的に音楽をつくる試みを繰り返した。

演奏する順番は、始め笛1（篠笛）が前奏のように始め、箏の旋律や三味線が順次増え

ていき、盛り上がる形をとった。笛1（篠笛）と、1オクターヴ低く同音を奏する三味線は、「呼びかけとこたえ」のように同じ音型を交互に反復するよう工夫がなされた。

終わり方は、箏1がフレーズを8回繰り返した後、巾から一の絃まで順番に弾くのを合図に、すべての楽器が「ソ」や「レ」の音を弾いて盛大に盛り上げる形をとった。

譜例1 乃木調子



10

笛1

笛2

箏1

箏2

三味線

15

笛1

笛2

箏1

箏2

三味線

4-2. 「地蔵の音楽」の創作

①イメージの共有

地蔵が雪の上を歩いてくる神々しく神秘的な雰囲気表現するため、全音音階での創作等、試行錯誤を重ねた上で、箏を大楽調子に調絃した（譜例3）。

②音探し

譜例4のように、箏1の旋律づくりでは、始めは1音ずつ絃を順番に弾いていたが、「1音だと厳かなイメージができなかったため、2音を合わせ爪で弾くことで奥行がでるように工夫した」。4度の音の重なりが神秘的な響きを生み出すような工夫がなされた。

三味線は、「音の響きと空間を意識するように」、開放絃を鳴らす。箏2は、低音の絃で1小節の短いフレーズを創作し、やわらかい音を出すために絃をはじいて弾く奏法にした。篠笛は、「これまでの演奏では旋律のような役割をしていたが、今までとは違い1音をアクセントとして入れることで、曲にまとまりをもたせるように」した。

③音楽の構造

「お地蔵さんがおじいさんの家にどんどん近づいていることを演出するために、楽器の数をどんどん増やしていく方法で、旋律も反復していく」という方針のもとで即興演奏を試みていた。

講師の助言により、始めに三味線が「無拍で、地蔵が遠くから近づいてくるイメージで」、静かに、響きや余韻を大切にしながら入ることにした。その後、箏2が絃をはじく奏法でやわらかく入っていき、箏1の旋律が重なる。他の楽器の音にそっとのせるように篠笛の装飾音が入ってくる頃から、次第にクレッシェンドしていき、地蔵が近づいてきたことを表現し、自然にテンポを上げていく。

最後の2小節で次第に弱く、テンポも遅くしていき、最後の篠笛の音のみ1音下げること、曲が終わった感じを出すという構成にした。

三味線は空間を意識して無拍で開放絃を奏でたり、箏が合わせ爪や絃をはじく奏法を使ったり、篠笛が装飾音として他の楽器の音にそっとのせるように1音を反復する形等、それぞれに楽器の特性や奏法を生かした工夫がなされた。また、地蔵が次第に近づいてくるイメージを表現するために、強弱やテンポの工夫もなされた。

一人ひとりがお互いの楽器の音量や音色を聴き合いながら、間やテンポを合わせて即興的に音楽づくりがなされた。

譜例3 大楽調子



譜例4 地藏の音楽

笛

第1

第2

三味線

p

6

笛

第1

第2

三味線

p

11

笛

第1

第2

三味線

rit.

rit.

rit.

rit.

4-3. 「おじいさんの音楽」の創作

①イメージの共有

「雪のしんしん降る田舎で静かに暮らしている、優しいおじいさんのイメージ」を表現するため、箏を平調子に調絃した（譜例5）。

②音探し

譜例6のように、箏1の旋律づくりでは、「おじいさんの雰囲気、優しさはあるが貧乏であるその寂しさを表現するために、遅いテンポの中で、ゆったりとしたリズム」をイメージして創作していた。講師の「(絃を) 行ったり来たりするとメロディーができる」という助言を基に音探しをしていき、4小節のフレーズを創作した。

箏2は、「雪のしんしん降る田舎で静かに暮らしているイメージ」を想起し、ベース音を合わせ爪でつくってみたい、絃をつまんではじいてみたいと、試行錯誤を重ねていた。さらに、講師の助言で、絃を四から一まで分散和音で鳴らすアイディアが出された。最終的には、分散和音で鳴らした後、絃をはじいて鳴らすフレーズが出来上がり、曲に変化が生まれるように工夫がなされた。篠笛は、他の楽器に装飾的に重ねるため、平調子の音「レソラ」を繰り返し、最後はリズムに変化をつけて終わる形にした。三味線は、「おむすびころりん」のテーマの旋律で、おじいさんを想起させる旋律を繰り返す。

③音楽の構造

始めに静かに、落ち着いた速さで三味線が入り、次に箏1の旋律が現れる。そして、ベースとなる箏2が重なり、最後に装飾的に篠笛が重なっていく。「だんだんとおじいさんが歩き進んでいる様子を、1人ずつ参加していく形式にして表現」していた。

箏1が旋律を2回繰り返したら終わりという共通認識の下、それぞれが異なる旋律やリズムを奏でていたのが最後はすべての楽器が「ラ」の音で終わり、まとまりをもたせることで、曲の統一感が生まれた。

4-4. 「地蔵の歌」の創作

地蔵が真夜中に、雪の中を「じょいやさ、じょいやさ」とそりを引き、じいさまの家に近づいてくる場面で、「6人の地蔵に かさをかぶせた じいさま ばあさま どこだ」という「地蔵の歌」を創作した。

始めに、地蔵がゆっくりと神々しく歌っているイメージを想起し、四分音符と八分音符でゆっくりと歌うことができるようにリズムを考案した。次に、歌詞の音の高低を考えて、「ファ」、「ソ」、「ラ」の3音を使って旋律を譜例7の通り創作した。

この歌は、篠笛が旋律を演奏し、箏や三味線の楽器担当の学生は、歌詞を歌いながらそれぞれの楽器で即興的にベースとなる音を鳴らしたりして伴奏した。

譜例5 平調子



譜例6 「おじいさんの音楽」

笛

箏1

箏2

三味線

6

譜例7 「地藏の歌」

ろ く にん の じ ぞ う に か さ を か ぶ せ た

4

じい さ ま ばあ さ ま ど こ だ

5. 結語

創作過程においては、物語の情景や登場人物のイメージを共有し合い、それに合う箏の調絃を決めることで、旋律づくりや、三味線と篠笛の「音探し」がしやすくなった。

音探しでは、グループのメンバー全員で、一面の箏を囲みながら、担当の楽器のみではなく、各楽器の様々な奏法を試して聴き合いながら、「その音がおもしろい」「その鳴らし方が面白い」と話し合い、フレーズを決めていた。

すべての楽器を合わせて即興的に音楽をつくる場面では、反復したり、他の楽器との掛け合いを考えて、重ねたり、ずらしたり、「呼びかけとこたえ」のように、異なる楽器同士で掛け合いを楽しんだり、様々な工夫をするようになっていった。

また、始め方や各楽器が入る順番を変えたりすることで、曲の印象が全く異なることに気づき、次第にどのように音楽の構造を考えたらまとまりのある音楽になるのかを考えるようになった。始めは1つの楽器から始め、次第に楽器が増えていき、最後は全ての楽器を盛大に鳴らして終わったり、最後にフレーズの形を変えて箏が巾から一まで順番に弾いたり手で合図をしたりすることで、楽譜を作成しなくてもお互いを見合いながら呼吸を合わせて終わることができることも学び、お互いの楽器の響きをより聴き合い、相手の演奏を受けて「次はこう出よう」という能動的な意識が生まれていた。

今後も本研究で積み重ねた協働で音楽をつくる楽しさを味わう活動を継続していき、創作過程の検証では、創作過程でみられる学生同士の相互行為について、より精緻に検証を試みていきたい。

【引用・参考文献】

岩崎京子・文（1967）『かさこじぞう』ポプラ社

文部科学省（2017）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 音楽編』東洋館出版社

吉原佐知子（2022）「『邦楽ワークショップ』授業での実践紹介―箏による《ソーラン節》の音楽づくりを例として―」『洗足論叢50号』p.105－115

【付記】

本研究は、鎌倉女子大学研究倫理審査（鎌倫－23004）を受けており、ビデオ撮影やレポートの記述等のデータを掲載することについて、承諾を得ている。